「君は弱い」

「……」

　水色のセーラー服の上にった白衣をたなびかせるの言葉に、はうつむく。

　に助けられて彼女の活動について歩くようになって以来、彼女は自分の弱さを痛感していた。

「有機物を変質させる君の純粋概念は魔導研究者にとっては垂涎ものだけど、反面、戦力としてはお粗末だね」

　純粋概念【魔】。

　摩耶の持つ能力は名前こそまがまがしいが、発動できる魔導の効果は他の純粋概念に比べて非力だった。まったくの異なる異界から、召喚する能力。呼び出せる魔物にしても、白亜やはもちろん、武装導器で固めた治安部隊にあっさり駆逐されてしまうほど弱い。

　おそらく摩耶に宿っている純粋概念ほど弱いものは他にないだろう。実際、白亜たちと合流してから摩耶が力になれることはなかった。摩耶は守られてばかりだった。

　だからこそ、次の言葉は予想もしていなかった。

「だから、怖いんだよ」

「え？」

「もし君がになった時、どれほどになるのか。僕にもそれがわからないんだ」

　。

　廼乃がいま口に出した単語は、記憶を失った日本人のなれの果てを示すものだ。純粋概念の発動は、精神を構成する記憶を代償として発動する。なんの対策もなく純粋概念を行使し続ければ、精神が純粋概念にまれて概念のまま魔導をまき散らす災厄となるのだ。

「で、でも……あたし、弱いわよ？」

「だが、特殊だ」

　弱気な言葉に、即座に反証がされる。

「この世界に召喚された日本人は、次元の経路を通過するときに概念を付与される。純粋概念といっても、世界に存在するものに対して作用するものでしかない。いまこの星にあるものに準じた現象を導力で発動する。それが魔導現象というもので、僕も、龍之介も、あの白亜ですらその法則は変わらない。作用する力が莫大であれど、この世界のに収まるものだった」

　に輝く星型の導力光が、摩耶を射抜く。

「だというのに、君とカー君の純粋概念だけは、無から有を創り出すことができる」

　廼乃の言わんとする意味が、摩耶にはよくわからなかった。

　確かに摩耶の魔導は、この世界には存在しない場所から魔物を召喚する。研究者によって『原罪概念異界』と名付けられた異界がなぜ存在するのか、どうしてそこに魔物がいるのか、まったくの不明だ。

「カー君は、史上二人目の【器】だ。かなり昔に初代の【器】はになって討伐されたから原色概念はカー君以前から偏在しているけど、カー君はそれをさらに洗練させた。正直、カー君は初代【器】なんかより、次元が違うほどに原色概念を使いこなしている。そして摩耶……【魔】の純粋概念を宿したのは君が世界初だ」

　廼乃の瞳にある感情は、まぎれもないだった。

「君の原罪概念異界と、カー君の原色格納空間。君たちの純粋概念は、この世界とは違う次元から力を引き出している。もちろん魔導なんてものがない地球にもつながっていない。ということは、たぶん君たちの概念は、どこかの世界の種になりうる場所なんだ」

「世界の……種？」

「ああ。君が有機物、カー君は無機物だという違いはあれど、君たちの純粋概念は異なる世界を内包している。この世界から派生した違う世界の創世者足りえる可能性がある君たちのは、本当にどうしようもない災厄になる。そんな気がしてならないんだよ」

　語られる内容に、摩耶は徐々に不安になってきた。

「それって、予言……？」

　廼乃。

　彼女の瞳に宿る純粋概念【星】の能力、未来予知は有名だ。現代日本を超える高度な導力文明であるこの世界でも、一度として外れたことのない彼女の予言を渇望する人間は数多い。

「ん？　違うよ」

　廼乃はあっさりと首を横に振った。

「いくら純粋概念を持っていても、人間の脳みそじゃ未来情報の演算は不可能だからね。僕一人でできるのは未来情報の抽出までで、予言として確定まで至る解析は無理だ。世界に名高い天才美少女ノノちゃんといえど、一人で予言は宣告できないよ」

「え？　じゃ、じゃあ……」

「ほほう、この大天才たる僕一人ではできないなら、どうすれば予知ができるかって？　そこは、このカー君の功績さ！」

　そんなことは聞いていないのだが、上昇を始めた廼乃のテンションは止まらない。今日は立方体になって浮いている物質Ｘこと純粋概念【器】の持ち主、をばんっとく。

「カー君はすごいんだぞ！　量子コンピューターもっの高度演算性能がある導力回路をワンオフで創造できるんだ！　僕が受け取った未来情報を、カー君が造った魔導演算回路で解析することで僕たちの大魔導【占星】は完成するんだよ！　つまりあらゆる予言は僕とカー君のと愛の結晶っ、二人の子供といっても過言じゃないね！」

「ふーん？　それってすごいの？」

「ああ！　演算装置が人型褐色美少女なのはキモいけど、カー君はすごいんだぞぉ！　いま作ってる北の魔導施設だって、カー君の【星読み】ありきだしね！」

　すごさがぴんとこなかった。摩耶からすると、やろうと思えば空の月ほどに巨大になれるという龍之介や、その彼よりさらに強いという白亜のほうがよほどすごいように思える。

　小首を傾げる摩耶をよそに、廼乃は白衣をまとったで浮遊している謎物体を小突く。我堂が入っているらしい物体は日によって形が変わるのだが、今日は立方体だった。

「ははは、カー君ってば、赤くなっちゃって。照れるなよ。君はすごいんだぞぉ、うりうり。もっと自分を誇れよぉ！　へへ、こんなに熱くなっちゃって照れすぎ……あづぅッ!?」

　廼乃の白衣が、ぼわっと発火した。

　真っな色で発熱しているあたり、摩耶から見ると照れというより怒りの赤のような気がしていたのは気のせいではなかったようだ。廼乃の絡みかたがうざかったのだろう。

「も、燃え──ちょ!?　カー君!?　なんで──ぇうあちちちちッ!?　あんぎゃー！」

　文字通り炎上した廼乃が悲鳴を上げて地面をのたうち回る。

　友情なのか慈悲なのか、それとも追い打ちなのか、全身に火が回る前に、一部の色を青くした謎物質Ｘから水が噴射されて廼乃を消火する。

「ふっ、ありがとう、カー君。やっぱりボクたちは固い絆で結ばれているんだね」

　火が消えるやいなや、ずぶぬれになった廼乃が水をらせながら、ニヒルに笑う。

「そもそも、この世紀の天才美少女ノノちゃんがいる限り、君たちがになる心配はないんだよ。記憶の供給装置なんてなくても、僕が【星】から世界記憶を引き出せるからね！」

　彼女の言葉通り、廼乃はの純粋概念で記憶が補填できるな能力の持ち主だ。純粋概念を持ちながら、決してとなることがないと運命づけられている稀有な存在である。

「記憶の供給導器をクラウド化したのも、ボクの功績だぜ？　もとから記憶の供給導器はあったけど、あれは事前に記録しておくのが大前提だからね。古き良き上書き記録のセーブ＆ロードのゲームシステムと一緒だよ。万が一の時はぜーんぶパァ！」

「古いの？」

　ゲームのデータ保存が上書きなのは普通じゃないかと首をげる摩耶に、廼乃がきらりと瞳の星を光らせた。

「お。摩耶。君、平成初期の生まれだろう」

「そうだけど……」

「ボクは令和後期生まれだ。君より、半世紀くらい後の日本から来た」

　未来から、と聞いてびっくりと目を見開く摩耶に、廼乃がふふーんと胸を張る。

「地球からこの世界に召喚される条件は、だいぶ限定されているからね。統計的事実から、場所は日本で、時代は昭和中期から令和後期までなんだ。なんでかっていう仮説は立ててるけど……聞きたいかい？」

「ぜんぜん聞きたくないわ。廼乃の話、いっつも小難しいんだもの」

　長く難しい話には興味がない。マヤの答えに話したがりの廼乃がしょんぼりとする。

「そっかぁ……ま、つまりボクの純粋概念【星】の世界接続は、未来を読むためのステップなんだよ。星に遍在する導力に記憶された情報を読み取るための、より深い接続だぜ！」

　その人が現在に至るまでのすべてを知らなければ、未来を読めるはずがない。記憶を引き出せるのは、彼女の純粋概念の副産物に近い。

　自分の能力を明かした廼乃は、そっと摩耶の頭に手を置く。

「だから、なんだ。この星の情報を知れる僕は、君がひどい目にあってきたことも知っている。つらいことがあれば、遠慮なく打ち明けたまえよ、摩耶」

「……廼乃」

「なんだい？」

「れた手で、人の髪に触らないで。かわいいあたしの髪型が崩れちゃうわ」

「かわいくないな君は！」

　助けてくれて、守ってくれて、時に笑い合う彼女たちと自分は、確かに仲間だった。